

## 教育学演習 2・8 について

梅本 洋

教育学演習 2・8 には「教育原論」という副題のようなものがあります。これは、この演習科目では、基礎研究的な内容を扱うということを意味しています。教育に関する基礎研究といっても余りピンとこないかもしれませんが、医学になぞらえれば、病気やケガの治療に直結する臨床医学に対する基礎医学（たとえば生理学・解剖学・病理学など）に相当するといったコンセプトであると思ってください。

そのようなわけで、これまでこの演習では、教育や人間形成にかかわる根本的・根源的な諸要因をテーマとしてとりあげてきました。たとえば、最近の数年間では、親子の関係性の問題や人間形成における進化的な制約条件の問題などを扱っていますし、もっと以前には脳科学と教育の接点を探るといったテーマを設定したこともあります。

今年度は、昨年度のテーマから派生させるような形をとって、認知バイアスとの関連において教育や人間形成の諸問題を考えてゆくことにしたいと思います。認知バイアスと聞いて、何か具体的に思い浮かぶものがあるでしょうか。認知というのは、平たくいえば心の働きのことで、さらにいえば脳の働きのことです。具体的には、感覚、知覚、思考、判断、感情、意思、意志、記憶、選好、想像などなど実にさまざまな働きが挙げられますが、いずれもいろいろな形で教育や人間形成と密接に関わってくることは容易に見てとれると思います。

認知科学の研究によれば、私たち人間におけるこれらのさまざまな認知の働きには、教育や人間形成に先立つ形で、いわばデフォルトとして非常に強力なバイアスがかかっていることが知られています。バイアスがかかっているということは、私たちの認知のあり方が、私たちの知らないうちに特定の誤った方向に歪められたり、不合理なあり方に誘導されたりするというところにほかなりません。すると、これは、種々の事象や問題に関する適切妥当な認識の生徒による獲得を目指す教育にとって、大きな阻害要因となるといわざるを得ません。これによって、人間における認知バイアスは、教育にどのような課題を提示することになるのでしょうか。また、認知バイアスとの関連で教育にはどのような可能性が考えられるのでしょうか。さらには、私たちの日常生活や人生設計における諸問題との関連で、認知バイアスはどのような形で影響を及ぼすのでしょうか。そもそもいったいどのような種類の認知バイアスが検出されており、それらの認知バイアスの背景にはどのような要因が潜んでいるのでしょうか。認知バイアスをめぐるこうしたさまざまな問題に、できるだけ多角的にとりくむことにしたいと思います。

春学期の演習 2 では、主として文献研究を行います。使用する文献としては、下に掲げたものを考えています。秋学期の演習 8 では、参加者が提示したテーマに沿って発表を中心に進めてゆきます。必ずしも認知バイアスに関係しないテーマでも、幅広く許容する方針です。

以下に春学期の演習 2 で使用する文献を提示しますが、全員が同じ文献を使用するというわけではなく、またどの文献も一部分しか使用しませんので、これらの文献を購入する必要はありません。大学の図書館や地元の公立図書館で借りるなどして調達するようにしてください。なお、授業開始

に時点で、使用文献が若干変更される可能性があることを付け加えておきます。

- 鈴木宏昭『認知バイアス—心に潜むふしぎな働き』、講談社ブルーバックス、2020年
  - 第2章「リスク認知に潜むバイアス—利用可能性ヒューリスティクス」
  - 第3章「概念に潜むバイアス—代表性ヒューリスティクス」
- 垂水雄二『科学はなぜ誤解されるのか—わかりにくさの理由を探る』、平凡社新書、2014年
  - 第三章「複雑な現象の理解は簡単ではない」
- 三井誠『ルポ 人は科学が苦手—アメリカ「科学不信」の現場から』、光文社新書、2019年
  - 1・1「人は学ぶほど愚かになる？」
  - 1・2「科学のない時代に進化した脳」
  - 3・1「創造論」
  - 3・2「地球温暖化懐疑論」
- D. カーネマン『ファスト&スロー—あなたの意思はどのように決まるか？ 上・下』、ハヤカワノンフィクション文庫、2014年
  - 第1章「登場するキャラクター—システム1（速い思考）とシステム2（遅い思考）」
  - 第3章「怠け者のコントローラー—論理的思考を備えたシステム2」
  - 第7章「結論に飛びつくマシン—自分が見たものがすべて」
  - 第9章「より簡単な質問に答える—ターゲット質問とヒューリスティック質問」
  - 第11章「アンカー—数字による暗示」
  - 第13章「利用可能性、感情、リスク—専門家と一般市民の意見が対立したとき」
  - 第15章「リンダー「もっともらしさ」による錯誤」
  - 第19章「わかったつもり—後知恵とハロー効果」
  - 第20章「妥当性の錯覚—自信は当てにならない」
  - 第23章「外部情報に基づくアプローチ—なぜ予想はずれるのか」
  - 第28章「悪い出来事—利益を得るより損失を避けたい」
  - 第33章「選好の逆転—単独評価と並列評価の不一致」
  - 第34章「フレームと客観的事実—エコンのように合理的になれない」
  - 第35章「二つの自己—「経験する自己」と「記憶する自己」」

以上